

ナミハタの産卵集群を守る

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-06-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 町口, 裕二 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2008564

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



ちゅら海便り

— ナミハタの産卵集団を守る —

石垣支所長 町口 裕二

サンゴ礁にすむ沿岸性魚類には、繁殖シーズンになると特定の海域に集まり産卵する種類がいくつか知られています。このような産卵集団への漁獲が、サンゴ礁の沿岸性魚類の個体群存続に影響を与えることが世界各地で報告されています。

八重山地方ではサッコミーバイと呼ばれるナミハタ（ハタ科）は重要な水産資源ですが、その漁獲量は年々減少傾向にあり、その要因のひとつとしてナミハタの産卵集団への漁獲が考えられています。ナミハタの産卵集団は、八重山地方では小浜島と西表島の間にあるヨナラ水道で高密度の産卵集団が形成されることが知られ、月の満ち欠けや水温と関係しており漁業者は経験に基づいてナミハタの産卵集団の形成時期を予測して集中的に漁獲していました。そこで、八重山漁業協同組合が主体となり、ナミハタ資源の回復を目指す新たな取り組みとして、2010年5月4日～8日の5日間、ヨナラ水道の一部に約1km×3.6kmの広さの禁漁区を設置し、産卵集団への漁獲自粛を漁業者や遊漁者へ呼びかけました。

その結果注目すべき結果が得られました。当支所では、沖縄県水産海洋研究センター石垣支所と共同で、ヨナラ水道のナミハタの産卵集団を2007年から調べていますが、これまでの調査では、産卵時期のナミハタの密度は最も多い場所で100㎡あたり約11個体でした。しかし、今回の禁漁区設置により、ナミハタの密度は最

も多い場所で100㎡あたり約260個体であり、漁獲圧がない状態では非常に高密度な集団を形成することがわかりました。また、産卵集団形成のピークは5月6日で、2日後の5月8日は産卵集団がほとんどみられなかったことから、5日間の禁漁期間中にナミハタが集団して産卵し、その後に速やかに産卵場から移動したことが窺われました。このことは、わずか5日間の禁漁でも産卵集団を守る効果が十分であることを示しています。さらに、意外な効果も明らかとなりました。これまでに、産卵集団を集中的に漁獲することで産卵時期にナミハタの価格が暴落したことがありましたが、今回の措置により産卵時期にもかかわらずナミハタの価格は比較的安定しており、ナミハタ資源への圧迫と価格暴落の両方を防ぐことができました。また、関係者の意識も高く、5日間の禁漁期間中に違反船は一隻もありませんでした。

ナミハタの産卵集団を守る取り組みは始まったばかりです。産卵集団を守る効果は継続してこそ現われることでしょう。これからも、禁漁区設置によるナミハタ産卵集団保護の取り組みを継続していく必要があります。



みーばい産卵保護のための

自主規制への協力をお願い

(遊漁の方もご協力お願いします)

場所：ヨナラ水道 (赤線で囲まれた区域)

期間：平成22年

5月4日(火)～5月8日(土) (5日間)

内容：自粛(区域内全魚種禁漁)

八重山漁協では、みーばい(ハタ類)の資源回復を目的として、当海域を禁漁とする自主規制を始めます。みーばい類は産卵のために特定の海域に集まる習性があります。特にさっこーみーばい(ナミハタ)は、上記期間に産卵が集中すると予想されます。釣りなどを行う一般の方々も、ご理解の上、どうぞご協力お願いします。



八重山漁業協同組合
資源管理推進委員会

問い合わせ：0980-82-2448

協力：八重山道徳電灯漁り研究会
沖縄県水産海洋研究センター
西海区水産研究所石垣支所
沖縄県八重山農林水産振興センター



規制期間中にヨナラ水道で確認されたナミハタの産卵集団(2010年5月6日撮影)と自主規制を呼びかけるポスター